

# 特 集

学士課程の専門教育の意義を問う

## 特集：学士課程の専門教育の意義を問う

### 趣 旨

大学の学士課程をめぐることは、高校から大学へのスムーズな移行を支援したり、大学教育での学修や生活を充実させたりするために、多様な形態・方法で支援が行われてきた。

学生の学力や学習目的等が多様化し大学への適応に困難を抱える学生が増えていることをふまえて、とくに初年次教育のあり方は各方面から注目されている。高校の生徒・父母・学校関係者・都道府県教育委員会等からは要望や意見が提出され、直接間接を問わず働きかけもある。また、教育行政によっても多様な施策が講じられてきた。学生の変化に直面する大学関係者自身にとっても、初年次教育に対する関心は高まらざるを得ない。

一方、大学院レベルの教育をめぐることも関心は高まっている。政府による各種の政策の下で多様な目的をもつ進学者が増加する中で、従来の大学院教育のあり方が問われている。また、専門職大学院制度の発足以後、研究者養成を目的とする伝統的な大学院教育のあり方の見直しも迫られてきた。

初年次教育や大学院教育と比べると、学士課程の中間段階に位置する主に3～4年次に行われる専門教育については、その目的・目標や、学生の学修支援の在り方が議論の対象となることは、比較的少なかったように思われる。しかし、3～4年次の教育を充実させることは、初年次教育の多様な取り組みやその成果を活用・発展させるために不可欠である。また、学生に大学院進学を促したり、進学後の学修を円滑に進めさせるうえでも重要である。学士課程卒業後に就職する学生にとっては、学校教育の最終段階となるため、大学院進学者以上にその教育は重みをもつ。

3～4年次の専門教育をめぐる状況は、大学の特徴や専攻分野別によって異なる。いずれも卒業後の進路を視野に入れた教育の組織化という点では共通しているが、大学院進学者が大半を占める大学・専攻分野では、大学院教育との連携を考慮することが必須である。就職者の多い大学・専攻分野では、学生の社会生活や職業生活との関連性を考慮することが不可欠である。人文・社会科学系では、近

年、一部で学部不要説もささやかれるだけに、この点はいっそう重要になっている。

このような状況の中で、学士課程の専門教育の存在意義を社会に提示すること、その前提として大学関係者がその意義を確認・共有したり社会に発信したりすることが、学部の存続にとって不可欠になっている。

本特集では、研究大学である名古屋大学の各専攻領域における学士課程専門教育をとりあげる。具体的には、以下のような問題を中心に、各学部・研究科所属の教員に論じていただいた。

- 1) 学士課程の専門教育の目的・目標をどのように設定しているか。
- 2) 目的・目標達成に向けて、研究科・学部としてどのような取り組みを行っているか。
- 3) 専門教育の意義をどのようにとらえているか。それを学部所属の学生や社会にいかにかに伝えているか。
- 4) カリキュラム編成にあたってどのような配慮を行っているか。
- 5) 学部専門教育の課題はどのようなものと考えているか。

現在、一部では組織改編を進めている学部もあるが、当該学部を含めて各学部が現在実施している専門教育の実施状況や今後の課題について検討していただくこととした。

佐久間氏（文学研究科）は、再編が進む人文系の専門教育を取り上げた。人文系の教育の特徴として、積み上げ方式のカリキュラムがなじみにくいこと、習得した能力の定量的な測定が難しいこと等をまず指摘した。そのうえで、教養教育や大学院教育との接続のあり方について、教養教育と専門教育を異なる理念の下に位置づけ直すことの重要性を言及しつつ、アクティブラーニング導入の可能性と必要性について検討した。

園田氏（経済学研究科）は、経済学の基礎的分析力と自主的探求力の養成を目標に、数学・統計学の基礎習得後に専門基礎科目、さらに専門科目を履修させている状況を解説した。学生が求める経済学の知識と理解のレベルによって、専門教育の目的・目標や

内容が異なることを指摘した。そのうえで、学部不要説に対して、経済学の直観的理解の不足、大学院レベルの分析道具の理解不足等を招くものとして批判している。

田川氏（工学研究科）は、学部・修士・博士の教育を従来の4+2+3から3+3+3へと再編する工学研究科の取り組みを取り上げた。これはLate specializationを志向しており、基礎教育が不十分な状態での専門教育により意欲低下を招く、大学院教育との関連がわかりにくい等の弊害の克服を目的としている。これを通じて、基礎教育を十分に受けた後、自らの適性と興味に応じた進路選択の実現を目指していることを指摘した。

北氏（情報学部）は、情報文化学部から改組された情報学部のカリキュラムを取り上げた。その特徴として、①文理融合型専門基礎科目の導入、②専門性と総合性を加味した専門科目の設置、③クォーター制の導入、④Late specializationの導入、⑤実践的教育科目の単位化等を指摘する。そのうえで、専門基礎科目と専門科目の内容と特徴を具体的に説明している。

谷口・中川・山本・石黒・川北氏（農学部）は、農学部の教育プログラムの現状とカリキュラム改革について取り上げた。学部学生の大学院進学率が8割に達する中で、学部・大学院をあわせた6年一貫教育を念頭に置いた学部カリキュラムの改編を進めている。同時に、専門教育の前提となる基礎的知識の確実な習得に向けて、1・2年次で履修する農学部専門基礎科目に加え、全学教育科目のうちの理系基礎科目の大半を全学科共通で必修化した。3年次からは多様な内容の実験・実習のほか、海外大学と連携した海外実地研修や短期インターンシップ等の意欲的な取り組みを行っていることを紹介している。

多忙な中、貴重な論稿をお寄せくださった各氏に感謝申し上げます。同時に、本特集が学士課程段階の専門教育の意義について改めて考察する機会になることを願っている。

編集委員長 夏目達也